賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」（その3）

1934（昭和9）年『家の光』2月号
東助、行商しながら多くのことを学ぶ
『家の光』3・4月号
春駒、さまざまな角度から産業組合を語る

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

長野県上田市の藤井亭で働きだした東助に、農村、産業組合を学ぶチャンスがやってくる。さかなを行商することで当時の農村経営、産業組合運動の先進事例を目にした東助は多くを勉強する。

次に、商権擁護連盟の晩さん会における春駒の商権擁護連盟幹部とのやり取り、とりわけ気風のいいセリフに注目したい。さらに産業組合を知らない芸者屋の女将であるお竹に、国定忠治を活用して、産業組合を理解させることにも注目したい。論文だけでなく多くの小説を書いた賀川の狙いはここにある、と筆者は考えている。

東助、さかなの行商に出て、産業組合・農村経営方法を学ぶ

前回の最終部分で、早朝に春駒と出会い彼女の話を聞くうちに、東助の心に「産業組合を、もう少し実質的に研究したいという気持ちが起こった」ことを見た。東助が産業組合研究を志す契機となった出来事である。そうした東助に、農村、産業組合を学ぶチャンスがやってくる。

その日の午後であった。料理屋の藤井の養子になっている、東助の兄彦吉は、汽車で、福島県のほうへ出発した。そして東助は、兄に代わって、自転車の尻に、さかなのはいった箱を四枚積んで、行商に出かけた。東は、長野県小県郡神科（かみしな）から和村（かのう）まで、西は同じく小県郡別所温泉から、青木温泉までさかなを売って回った。

この経験は、百姓のほか、何も知らなかった東助の目を開いてくれた。

それは、小県郡の村々には、磐梯山のふもとで見られないような、完全な産業組合の組織が発達していることに、気がついたからであった。

この行商のなかで東助は「浦里村信用販売利用購買組合」をみつけ、この組合がさかなを取り扱うということを聞きつけたので、それを自分に任せてほしい、と売り込む。たまたまそこにいた浦里村の産業組合長 松下富太郎が認めることになる。これにより、東助はさらに農村経営についても学ぶことになる。

東助は、毎日、さかなの行商に出ることを、楽しみにするようになった。それは神科村に行くとメンヨウを飼うて、ホームスパンをやっている。農村経営の方法が、だんだんわかってき、和村にまで行くと、クルミを植え、ヤギを飼うて、農村経営を立体的にやることによって、負債整理を、完全にやりつつある状態が、日一日明らかになってきたからであった。

このように行商をしながら、大きな学問をしたのである。

反産運動と組合芸者

東助がさかなの行商を始めたころ県会議員選挙が、白熱化してきた。上田市を中心とする小県郡では、反産業組合主義者の大谷初蔵と産業組合長の松下富太郎が猛烈に戦っていた。選挙演説会のポスターがいちめんに張り回され、流言飛語が毎日飛んだ。投票日の前日には藤井亭で、上田市の商権擁護連盟の晩さん会が開かれることになった。

1934（昭和9）年3月号は「反産運動と組合芸者」という刺激的な見出しで始まり、反産運動の様子と春駒の気っ風のいいセリフが書かれ、晩さん会のシーンから始まる。

大谷は、床の間を後ろにして、みんなの中央にすわらせられていた。しかし、じつは今夜の宴会は、彼の選挙運動費から出たものであって、商権擁護連盟の晩さん会というのは、ただ一種の看板にしかすぎなかった。

しかし、大谷は八時から、三か所の演説会場に、顔を出さなければならないとかで、ご飯の出る前に、起立して、挨拶を始めた。

その要領はこうであった。産業組合は、全国三百五十万家族の小中商工業者の生活をおびやかすものであって、われらはだんぜん、彼等に反対しなければならない。日本の不景気は、まったく産業組合が発達したからである――と、十五分間くらいも、大谷は演説した。それがすむと、すぐ、席を立ち、玄関口まで、芸者に見送られて、待たしてあった自動車に飛び乗った。

大谷が去ったあとは、乱ちきさわぎになり、長野旅館の主人から産業組合に反対する意見が出るなか、春駒は次のように反論する。

「あなたはそう言われますけどね、わたしが身売りしなければならなくなっ

たのも、まったく、村に、産業組合がなかったからですよ。村に産業組合がなかったら、日本は、もっといまごろは、困っているでしょう」

春駒が大胆に主張したので、長野旅館の主人の左にすわっていた上田市商工会議所書記長の小田は、苦笑しながら言った。

「産業組合が発達したら、もう芸者なんかできなくなるぞ！」

春駒は、すぐ、彼に杯（さかずき）をさしのべながら、答えた。

「それこそ、わたしたちの理想じゃありませんか。全国の芸者たちのうちで、好きこのんで、芸者になっている人が、何人あるでしょうね。芸者をしなくてもいいような社会をつくってくれるなら、わたしは、産業組合を、ほんとに宣伝しますわ」

春駒の大胆な言動に、村々の金持ちは、色を失ってしまった。

反産運動を展開する商権擁護連盟に所属する人々の産業組合を批判する概要、それに対して、身売りをして、芸者にならざるを得なかった春駒の産業組合に対する大きな期待をみることができる。

当時の『家の光』では、産業組合関係の記事も掲載されていた

東助は、今国定忠治？

春駒が所属する芸者屋鶴家の女将お竹は、春駒が東助に一目ぼれしたことを聞いて、東助に養子になってもらうことを決め、藤井亭に行き、東助を「養子にもらいたい」と告げる。藤井亭は鶴家が一流の芸者屋で多くの身代があることから、とりわけ兄の彦吉は東助に養子に行くよう勧めた。

「にいさん、わたしは、福島県へ帰りたいと思っているんです。もう少し産業組合を研究して、あの疲弊した村を、更生させたいと思っているんです。残念ながら、養子の口は断わります」

これに激怒した彦吉は、東助に殴る、蹴るの暴力を働く。そこへ裏口の戸を開けて入ってきたのが春駒であった。春駒は、あした限りで芸者をやめようと思っ

ていることを伝えに来たのであった。

春駒の「うちのおかあさんに会ってほしい」という言葉を受けて、東助は鶴家にお竹を訪ねる。お竹と東助のやりとりがあったが、東助はどうしても養子になろうと言わなかった。それで春駒は女将さんにふり向いて言った。

「東助さんは、産業組合を村々に興して、みんなの力でよくしようという考えを持っていられるんですわ」

産業組合ということを初めて聞く女将さんは、まだ合点がいかなかった。

「産業組合っていうのは、そんなに村の人を助ける力があるんですかね？どうして助けるの？」

春駒は、越後で経験した自分の村のことを、お竹に話した。

「おかあさん、それ、国定忠治は、大名のいばるのをおさえつけて、村々の困った者を助けたでしょう。産業組合っていうのはね、その国定忠治のように、みんなが助け合いの気持ちでいっしょに働いて、村のいちばん困っている人を助けて、金持ちにはもうけささぬようにしようっていうんですよ」

お竹は吸いかけていたシガレットを、灰の中に突きさして、興奮した口調で言った。

「すると、東助さんは、今国定忠治というところなの？　えらいんだね」

産業組合のことは知らないけれども、国定忠治のことはよく知っているお竹は、春駒の説明で、ようやく合点がいったらしかった。（略）

「お春さん、あなたはいい人を見つけたもんだね。こんな人が日本になけりゃ、日本は暗やみになりますぜ。うちも、芸者屋をやめるついでに、身代そっくりを、今国定忠治に使ってもらおうじゃありませんか」

これらの言葉を聞いて、東助は、目頭が熱くなるのを覚え、善人を、神はけっして捨てないと、心の中で天に感謝する。

産業組合を説明するのに、国定忠治を持ってくるところに賀川の小説の面白さがある。

＜参考文献＞
『家の光』（昭和9年2月号、3月号、4月号）
＊文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』（2009年）を参考にした